

【アジアで会う】高島雄太さん・ハンセン病回復者支援団体 第312回 差別のない社会へ歩む（インドネシア）

たかしま・ゆうた：1988年、香川県生まれ。大阪外国語大学（2007年に大阪大学に統合）でインドネシア語を専攻。学生時代に1学し、首都ジャカルタ郊外のタンゲランにあるハンセン病回復者とその家族らが暮らす定着村で生活した。その際に、現地の学生とハンセン病回復者に対する差別をなくすためのボランティア団体を設立。昨年発足した財団（日本のNPO法人に相当）ヤヤサン・サトゥ・ラン・ベルサマの創設にも関わり、現在プロジェクトコーディネーターを務める。



ワークキャンプでハンセン病回復者と交流する高島さん（右、本人提供）

インドネシアはハンセン病の年間新規患者数が世界で3番目に多い国だ。人口100万人当たりのハンセン病患者数は1人以下となり、世界保健機関（WHO）が定める「制圧」の基準は達成したものの、インドネシア政府によると毎年新たに約1万7,000人の患者が確認されている。

ハンセン病から回復した人たちに対する差別や偏見をなくすための活動を、インドネシアで10年以上前から続けている。現地の大学生と、日本から訪れた学生が、ハンセン病回復者の定着村で約2週間、回復者らとワークキャンプを開いてきた。村の道路舗装や排水溝整備をするなど一緒に汗を流し、一つ屋根の下で日々を過ごす交流活動だ。

学生らは、ハンセン病についてある程度の知識をあらかじめ持っていたとしても、いざ回復者と対面すると、後遺症が残る外見をみて最初は怖いと感じたり、拒絶反応が出てしまったりすることも少なくない。日本から来た学生にとっては、彼らとコミュニケーションを取

るうにも言葉の壁もある。

だが、道路舗装という同じ目的に向かって作業をしていくうちに、学生たちは目の前にいるのは、「ハンセン病回復者」とひとくくりにした人たちではなく、一人ずつ名前を持つ「▲▲村に住む●●さん」だということに気付く。高島さんはNNAの電話取材に対し、活動の最大の狙いは「ここで出会った人の人柄を知り、顔の見える交流をすること」と話す。

参加者が現地での経験や出会った人の話を友人や学校の後輩に伝え、関心を持った人が翌年にワークキャンプに参加する。口コミで語り継がれ、10年間でのべ700人以上の学生が参加した。

■コロナ差別との共通点

ハンセン病の回復者は、彼ら自身だけでなく子どもや家族までもが偏見の目でみられ、社会参加の機会を制限されるなど不当な扱いを受けてきた。ハンセン病は薬で完治できる病気だが、社会に根強く残る差別感情が、重症化や後遺症を防ぐために必要な早期治療を阻んでいる。

高島さんは「新型コロナウイルスの流行が拡大する中、日本ではコロナにまつわる差別が社会問題化している。自身や家族が新型コロナに感染したとか、感染地域から来たというだけで、職場や学校でいわれなき差別を受ける人がいる」と指摘。ハンセン病回復者が直面する社会差別構造と共通する点があると話した。「日本でハンセン病は過去の病気になりつつあるが、コロナ禍の今、ハンセン病の歴史から学ぶことがある」と考えている。

■新たな道に

コロナ禍で今年のワークキャンプは中止せざるを得なかった。オンラインセミナーやSNS（会員制交流サイト）を活用し、キャンプとは違った形で情報発信を増やし始めた。

昨年末に財団を設立したことで資金調達ができるようになり、活動の幅も広がった。今後は、インドネシアの日系企業と連携して企業の社会的責任（CSR）活動に関わったり、ハンセン病回復者の就労支援や子どもの奨学金の支給なども計画している。

新たな取り組みの一つが、乳がん早期発見の大切さを伝える啓発活動のシンボル「ピンクリボン」のように、ハンセン病回復者への差別をなくす活動のシンボルマークの作成だ。最終段階まで進んでおり、近くデザインを公表できるという。

財団の名前、ヤヤサン・サトゥ・ジャラン・ベルサマには「同じ一つの道」という意味がある。「国籍や言語、宗教、ハンセン病をわづらったという過去、それらの違いを認め、一緒になってより良い社会をつくるために道を歩んでいきたい」という願いを込めた。新たな道へまた一歩、進み始めた。（インドネシア版編集・山本麻紀子）